伝統構法

北側から見た外観。ピロティにより「内と外」に連続性を持たせている

「200年もつ」高耐久住宅［神奈川県藤沢市］

自然素材と伝統構法により実現

国産材だけを使用し、伝統の「板倉構法（落とし込み板壁認定工法）」で建てた住宅が、このほど神奈川県藤沢市に完成した。板倉構法により、筋交いや金物、合板を使わずに耐震性を確保した。また、住宅の「内と外」に連続性を持たせながら快適な環境をつくる設計となっている。

設計は、住む人の健康と地球の環境に配慮した自然素材による建物づくりに取り組んでいる静水舎一級建築士事務所（東京都新宿区、芝静代代表）が手掛けた。施工は、伝統の貫工法を現代のニーズに合うよう改良した新伝統構法の住宅建築を全国で行う三浦創建（長野県塩尻市）。500㎡を超える敷地に、２階建て・延べ床面積約183㎡の住宅を新築した。

施主は大庭園草工房（藤沢市）代表で造園家の川口豊さんだ。「日本の住宅から失われつつある建物の内と外がゆるやかにつながる関係性を回復するモデルにしたい」という川口さんと、「家と庭」を設計のテーマにしている芝さんがコラボレーションした。床下の基礎部分を掘り下げることで、床高と外部土間の段差を10cmに抑え、室内と庭に一体感を持たせたほか、アプローチからピロティ、庭へとつながる部分を同じ鉄平石張りとし、素材による連続性も創出。まだ未完成の庭は、川口さんが今後10年ほどかけて「楽しみながら完成させる」という。

周辺環境に調和する バナキュラーな建物

構造材には天然乾燥した長野県産のヒノキを活用。外壁はスギ板とリシン掻き落としのコンビネーション。室内は、腰壁をスギ板とし、そのほかの部分には漆喰や石州和紙を用いた。「スギには人をリラックスさせる効果がある」（芝さん）という。化学物質過敏症にならない快適で健康に暮らせる住宅をつくることが芝さんのこだわりだ。断熱材はペットボトルをリサイクルしたポリエステル繊維と木質繊維の環境性能に優れたものを採用し、塗装や接着剤、シーリングといった細部についても「最低限イソシアネートフリー」といった基準を設けた。

全面的に国産材を用いる建築について芝さんは「日本の山の現状を考えれば、国内の住宅は国産材で十分建てられる」と強調する。川口邸は、国産材を無駄なく使うため、3800㎜×3800㎜の空間を連続させる間取り構成にした。これについて芝さんは「一般に流通する４ｍ材を最も無駄なく使い切ることができるサイズ」と説明する。さらに、木材以外の建築材料についても、土や石、紙などの自然な材料を国内から、それもできる限り100km圏内から集められるネットワークを構築。「建築におけるＬＣＡ（ライフサイクルアセスメント）に配慮することはもちろんだが、色調や風合いが周辺環境に調和するバナキュラーな（その土地固有の）建物になる」と、芝さんはその効果を指摘する。

伝統技術の継承に危機感

板倉構法は、柱の側面に彫った溝に横板を落とし込む工法で、今回導入した国土交通大臣認定工法（地球と家族を考える会）は壁倍率1.5倍を確保。金物や火打ちは使わず、柱頭柱脚を木栓によって固定、梁・桁を渡り顎工法で結合するなどして強度を高めた。

芝さんは、「自然素材の伝統工法の家は、きちんとメンテナンスさえしていれば、時間の経過によって建物に歴史が刻まれ、美しさを増しながら100年、200年という長い年月、使い続けることができる」と訴える。芝さんは建物が完成した後、施主に対して①メンテナンスの必要性とメンテナンスに対する心構え②完成後30年間にメンテナンスが必要な建物部位と作業表③メンテナンスが必要な部位の施工に関わった業者連絡先一覧表―の３種類の書類を進呈しているという。

芝さんが今、強く感じるのは「こうした伝統的な技術や国産の素材を用いた家づくりの仕事や職人が急激に減っている」という現状だ。このままでは「せっかくの日本の素晴らしい技術が後世に継承できなくなってしまう」と危機感を募らせる。「伝統構法は、今の進化した生活に伴う設備を取り入れ、リーズナブルな建築費で、なおかつ新しいモダンなデザインの家がつくれるということを、一般の人たちにぜひ知ってもらいたい」と力を込める。

設計者の芝静代さん

木や漆喰などの自然な素材に包まれた室内空間